



〈自分（たち）でつくるみんなの学校 ～日本一美しい学校を目指して～〉

成美っ子

学校だより 令和5年度No.8

道徳科「ぼくの名前よんで」から感じたこと

第5学年担任 高田 詩織

国語科や道徳科の教科書に載っている教材文には、自分が小学生の頃に学んだ記憶のあるものや、絵本として長く愛されているもの、新しい知識を得られるものがあります。その中には、大人になってから読んでも、改めて教えられること、考えさせられることがたくさんあることに気付きます。5年の学習の中で、特に印象に残っているのが、道徳科「ぼくの名前よんで」というお話です。

主人公の太郎の両親は、聴覚障がい・言語障がいがあり、聞くことも話すこともできません。両親の障がいに関する事で反抗したことがない太郎でしたが、けんか相手に、両親から名前を呼ばれたことがないことを馬鹿にされたことで、言いようもない寂しさと切なさに襲われ、父親に「僕の名前を呼んで！親なら子供の名前を呼ぶのは当たり前なんだ」と泣き叫びながら訴えます。「名前を呼べないなら、生まなければよかった」と言う太郎に、父親は、太郎が生まれた時のことを力強い手話で語ります。「我が子が生まれてきて、幸せだったこと」「声を出して泣くことができる子供だと知って、嬉しかったこと」「母が『一度でいいから我が子の声を聞きたい』と願い、聞こえない耳を太郎の唇に押し当て泣いていたこと」そして、「耳が聞こえなくても、最高の生き方をしていこうと約束したこと」「耳の聞こえない両親から生まれた子供である太郎にも、最高の生き方をしたいと強く願っていること」を語ります。

初めて見る父の涙に、太郎は何を感じたのでしょうか。きっと太郎は、父親の手話から、両親の強さや愛の大きさを感じただろうと思います。しかし、この先も両親が、声に出して自分の名前を呼んでくれることは決してないであろうことは、太郎自身が誰よりも分かっていると思います。「自分なんて生まなければよかったのに」と声に出して言うほどの太郎の悲しみや切なさは、計り知れません。また、聞こえない耳を押し当てて泣く母も、どれだけ願っても聞こえないということは、自分自身が一番理解していたはずです。それでも、太郎の声を聞くことを強く願い、泣き声の振動を感じながら、我が子を抱きしめていたのだと思います。この世に生まれた太郎を、何よりも大切に思う母の深い愛を感じます。しかし、もし自分が母親だったらと考えると、あまりにも切なく、様々なことを受け入れ、乗り越えるには、想像できないほどのたくさんの葛藤があったらと思うと思います。

授業では、「太郎の両親は、心の中や手話で、きっと何度も何度も太郎の名前を呼んでいただろうね」と話し合いました。太郎が両親からの深い愛情を受け取り、いつの日か、悲しみを乗り越えてほしいと願います。以下は、授業後の子供たちの感想です。

- ・私が太郎だったら、親の障がいのことは分かっているけども、太郎と同じように、我慢しきれずに泣きながら手話をしていると思います。できないのは分かっているけども、自分の子供の名前を呼びたい気持ちはあるのか、手話でもいいから教えてほしいと思ったからです。
- ・きっと、名前を言えない太郎の両親も辛いと思います。私たちは、名前を呼んでもらうことや話せることが当たり前だけれど、その当たり前のことをしてもらえない太郎は、辛いと思います。自分が健康に生まれてきたことに、とても感謝しています。
- ・太郎の両親は、自分たちは耳が聞こえなくても、幸せに生きようと誓っているから、太郎にも、自分の生き方を見つけて幸せに生きてほしいと願っているのだと思います。

道徳科の時間には、自分が感じたこと、考えたことを大切にするとともに、互いに伝え合い、分かり合おうとすることで、見方や考え方を広げたり、深めたりします。私自身、子供たちの感じ方考え方から、改めて気付かされることがたくさんあります。これからも、様々な読み物や出来事を通して、子供たちと共に、心の在り方や生き方を考えていきたいと思っています。